

# 中級日本語文法教材『実用日本語文法』の開発

宮崎 恵子 二瓶 知子 許 明子

## 要 旨

筑波大学留学生センターでは、中上級レベルの学習者に対し、技能別のクラスを開講しており、そのひとつに文法がある。一般に文法科目は言語形式を詰め込むことに偏りがちで、学習者は言語形式を知識として身につけはするが、それを適切な場面や状況で使えるようにならないと言われることが多い。そこで、筆者らは実生活で応用できる力をつけさせる教材が必要であると考え、中級学習者用の文法教材を開発した。

本教材は、日本の日常生活に即した文法の運用力を身につけることをめざして開発したものであるが、特に以下の3点を工夫した。一つ目は、初級の文法項目を復習・整理しながら中級の文法項目を学習できるようにしたこと。二つ目は、場面や状況を提示し、そこでの機能を詳細に記述するようにしたこと。三つ目は、実際にどのように使われるかを生の日本語で提示するために実生活に即した用例を採用したこと、である。本稿では、本教材の詳しい内容と授業アンケートから得られた結果について報告する。

【キーワード】 中級文法 教材開発 応用力

## Implementation of an Intermediate Japanese Grammar Text “Practical Japanese Grammar”

MIYAZAKI Keiko, NIHEI Tomoko, HEO Myeongja

[Abstract] At the International Student Center of the University of Tsukuba, we offer a range of skill-based classes for intermediate-level students, of which grammar is one. Generally speaking, grammar classes tend to present linguistic forms removed from their context, and so while students gain knowledge of linguistic forms, they often remain unable to use the forms in actual situations. Because of this, we saw the necessity to develop materials for intermediate-level students which will help them both to remember the grammatical items, and to develop the ability to use the items in real life.

These materials have the following 3 features. First, they both review and organize elementary-level grammatical items and introduce intermediate-level items. Second, they present the grammatical items and richly describe their functions against a backdrop of a situational context. Finally, they provide natural usage examples based on real life showing in authentic Japanese how the items are actually used. In the present report, we outline the contents of these materials in detail, and describe our current revision work based on feedback from student surveys.

[Keywords] intermediate Japanese grammar, development of teaching materials, applied skill

## 1. 開発の背景

### 1.1 センター概要

筑波大学留学生センターでは、J100からJ400レベルまで一通り初級の項目を学習した学生を中級レベルと判定し、500レベル以上の中上級レベルでは技能別のクラスを設定している。今回対象としているのは、500レベル以上の技能別クラスのひとつとして開講されている中級文法クラスである。2010年度はJ511・512、J611・612の2レベル4科目を開講し、2011年度はJ511（中級初期）、J611（中級前期）、J711（中級中期）の3レベル3科目の文法クラスを開講した<sup>1</sup>。2010年度は、500レベルの511と512の両方を履修し、どちらも合格すれば600レベルに進級できることになっており、600レベルも同様であった。2011年度はひとつのレベルに1科目としたため、同時に履修することはなく、それぞれのレベルを履修した後は次のレベルへと進級した。

### 1.2 中級レベルの問題点

初級を終えた学習者は、まず500レベルにプレースされるが、ここにプレースされた学習者が全員同じ知識を持っているとは言いがたい。中級レベルには、初級の項目は既習であるが定着していなかったり、使い分けまでは理解していなかったり、とさまざまな学習背景を持った学習者が中級レベルの文法クラスに集まることが多い。そのため、一言で「中級」と言っても、学習者によって持っている知識にばらつきがあるという問題点があった（許・鶴町 2009:26）。このような学習者を対象に同一レベルのクラスで授業をするのは難しく、それを解決することが中級レベルのひとつの課題であった。

### 1.3 中級学習者の問題点

一般的に文法の学習は、文法項目や文型を学ぶことに重点が置かれ、知識の詰め込みになってしまいがちである。それは、文法を学習する動機が大規模テストの受験対策であったり、その学習方法はパターンプラクティス中心になりやすいからかもしれない。その結果、「知識はあるが使いこなせない」ということになってしまふことが多い。実際に、中級にプレースされた学習者の中には、教科書に載っている内容は全部勉強したことがある、もしくは知っているという理由でレベルアップを希望する人が多くいる。しかし、実際に話してみると初級の項目だけで話していたり、中級の項目を使っても不自然であるか不完全であったりすることが多い。

以上のように、知識はあるものの産出ができない、正確さの点では不十分である、類似表現に関する知識が整理されていない、という問題があるため、それを自覚してもらい、補っていく授業が必要である。しかし実情は、一通り学習しているため既習項目を勉強することに抵抗を示す学習者が多く、初級の項目を復習しながらさらに深め、応用力をつけ

るといふ授業をするのは困難であった。

また、中級レベルは初級のときと比べて、「できるようになった。力が伸びた」という実感が持ちにくく、学習の停滞を感じる学習者が多くいると言われる。文法の知識を増やし、それを使えるようにするためには従来の文法説明、練習問題以外にも、その文法項目をどのような場面で使うかを示し、学習者が学んだことをすぐに使い達成感を味わうようにするための工夫が必要であると考えた。

中級レベルに集まる多様な学習者に対する授業の難しさ、知識として覚えるだけでなく実生活で応用する力をつけさせる授業の実践について考えていくうちに、初級文法事項が部分的に未習であったり抜け落ちていたりする学習者のために、初級で学ぶ重要な項目をもう一度復習、整理しながら無理なく中級の項目が学習できるような教材が必要だと感じるようになった。また、日常場面ですぐに使えるような、機能や場面がわかりやすく提示された練習問題や、大規模テストの形式に慣れるような練習問題も必要だと考えるようになり、センター独自の文法教材『実用日本語文法』の開発に向けて動き出すこととなった。

以下、本稿では、中級文法教材の開発について報告するとともに、本教材を使用した授業評価の結果について報告を行う。

## 2. 『実用日本語文法』について

### 2.1 教科書の内容

2010年度に教材開発を始めた段階では500レベルに2科目（全16課）、600レベルに2科目（全16課）を設定した。500レベル（中級初期）のテキストには、語形変化が少ない表現を中心に、そして、続く600レベル（中級前期）には、語形変化が多く、学習者が正確に運用できるようになるには時間を要すると思われるものを選定した<sup>2</sup>。

2011年度は、シラバスの改編に伴い、内容はそのままに3レベル3科目に組み直した。この組み直しによって、1学期に1科目だけを履修できるようになり、3学期間（約1年）かけて余裕を持って中級の項目が学べるようになった。2010年度は、500、600の2レベルとも1学期間に2科目を同時に履修でき、最短の場合2学期（約半年）で、中級で学習すべき4科目を終えることができた。しかし、それは復習し積み上げていく時間としては不十分だったため、1年かけて学習するスケジュールにしたのである。さらに2011年度は新たにコンピュータ遠隔教育システムMoodleによる練習を導入して、予習、復習を促した<sup>3</sup>。

再編成した2011年度版『実用日本語文法』の構成は以下の通りである。

表1 2011年度版『実用日本語文法』の構成

『実用日本語文法』		
500	600	700
1. 指示詞 2. 助詞 3. 複合助詞 4. の・こと・もの 5. 原因・理由 6. する・なる 7. いく・くる 8. 目的・可能・願望 付録 文のスタイル	9. 並列 10. 名詞修飾 11. 時の表現・テンス 12. 連用中止 13. 条件 14. 複合動詞 15. 自動詞と他動詞 16. 補助動詞 付録 接続詞	17. 敬語 (特別な形) 18. 敬語 (規則的な形) 19. 推量・伝聞 20. 判断・義務 21. 否定表現 22. 授受表現 23. 受身 24. 使役・使役受身 付録 副詞

## 2.2 各課の構成および内容

各課の構成と内容は下の表2に示した通りである。各文法項目の説明は「意味と使い方」で基本的な意味のまとめと確認をした後、「使い方のポイント」でさらに詳しい説明を加えるようにした。練習問題は、「練習1」の簡単な理解から「練習2」のより難易度の高い練習に進むように提示している。

表2 各課の構成

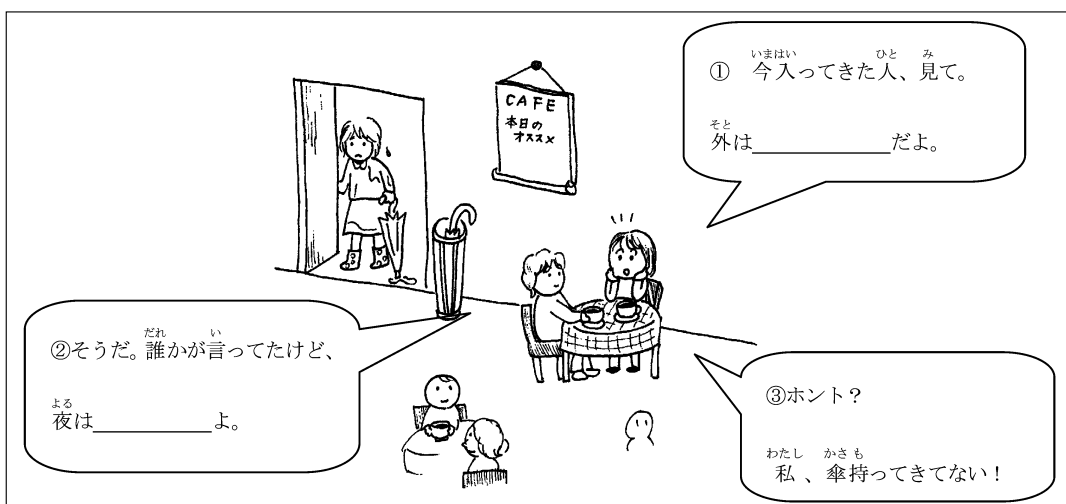
活動	ねらい	内容
1. スタート・トーク	ウォーミングアップ。学習項目の意識化。自分が持っている知識を振り返る。	絵を見て、その絵の状況ではどんな表現を使うか考え、会話を完成させる。
2. 意味と使い方	初級レベルで学習する項目の確認	学習項目についての基本的な意味、使い方を確認する。
3. 練習1	基本的な意味、活用の確認	動詞の活用や表現の使い分けを練習する。二択問題。
4. 使い方のポイント	中級レベルで必要な文法項目の確認	2.の「意味と使い方」の説明よりさらに詳しい説明。コロケーション情報や類似表現の使い分けなどを整理する。
5. 練習2	日本語能力試験等の大規模文法テストの形式に慣れるトレーニング	3.の「練習問題1」より難しい問題。使い分け、語彙の確認、類似表現との違い等を確認する。四択問題。
6. 文作り	場面による文法運用力、産出能力の向上、正確さを確認	学習項目を使った文作り、もしくは文完成練習を通して使い方の定着を図る。

7. 間違い探し	学習した文法項目の意識化	課の学習項目が間違っ て使われている文を 見て間違いを訂正し、 正しい使い方を確認す る。
8. 用例見つけた	学習モチベーションの 高揚、維持	実際の文章（生教材） での学習項目の使われ 方を見る。
9. クロージング・トーク	各課のまとめ	学習項目を含んだショ ートストーリーを読んで 暗記する。

以下、ひとつひとつの教室活動について見ていく。

まず、「1. スタート・トーク」である。ここでは、絵と会話の吹き出しを使って場面を与え、その場面、状況にふさわしい表現を考えさせた。この活動には、自分の持っている日本語力を振り返ると同時に、その日の学習項目を意識化させる目的がある。例えば、【資料1】は「推量・伝聞」のスタート・トークである。この場面では①の吹き出しに「雨が降ってるみたいだよ／雨みたいだよ」を、②に「台風が来るらしいよ」が入ることを期待している。①については、「雨だよ」や「雨が降りそうだよ」などの不適当な答えが出てきやすいが、なぜそれではだめなのかを状況に応じた適切性を考えたり、文法項目の制限に触れたりすることを通して学習項目を意識化していく作業となる。自分が持っている文法知識に目を向け、知っていることと知らないことを整理し、自分に足りない部分を自覚させる過程となる。

【資料1】 J711第19課 推量・伝聞の「スタート・トーク」(p. 155)



そして、「1.スタート・トーク」と同じ場面をモノログにした「9.クロージング・トーク」を設定した。これは5文程度の短いまとまりで提示し、できるだけ暗記するように指導した。クロージング・トークをスタート・トークの内容と一致させることで、学習者の記憶に負担をかけず、この場面ではこの表現を使う、ということが自然に頭に入るよう配慮した。

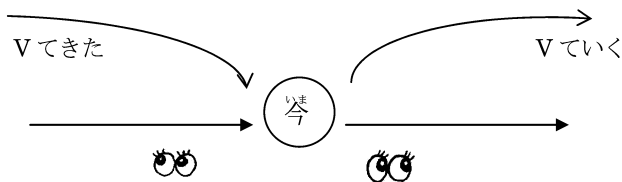
【資料2】J711第19課 推量・伝聞の「クロージング・トーク」(p.162)

ぬれた<sup>かき</sup>傘<sup>も</sup>を持った<sup>ひと</sup>人<sup>みせ</sup>が<sup>はい</sup>お<sup>と</sup>店<sup>み</sup>に入<sup>ら</sup>って<sup>き</sup>きた。外<sup>そと</sup>が<sup>み</sup>見<sup>え</sup>ない<sup>か</sup>ら<sup>わ</sup>か<sup>ら</sup>ない<sup>け</sup>ど、雨<sup>あめ</sup>が<sup>ら</sup>降<sup>り</sup>っ<sup>て</sup>いる<sup>よ</sup>うだ。その<sup>ひと</sup>人<sup>かた</sup>は、肩<sup>かた</sup>まで<sup>ぬ</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>し髪<sup>かみ</sup>も<sup>ぼ</sup>さ<sup>ぼ</sup>さ<sup>だ</sup>か<sup>ら</sup>、風<sup>かぜ</sup>も<sup>つ</sup>よ<sup>い</sup>そう<sup>だ</sup>。友<sup>とも</sup>だ<sup>ち</sup>の<sup>はな</sup>話<sup>なし</sup>によ<sup>り</sup>と、今<sup>こん</sup>夜<sup>や</sup>は<sup>たい</sup>風<sup>ふう</sup>が<sup>く</sup>来<sup>る</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>か</sup>ら、今<sup>きょう</sup>日<sup>は</sup>早<sup>はや</sup>く<sup>かえ</sup>帰<sup>ろ</sup>う。

次に、文法説明として「2.意味と使い方」以外に「4.使い方のポイント」を加えた。「意味と使い方」では、基本的な意味の説明を通じて初級の復習をし、基礎を固めるようにしている（【資料3】）。「使い方のポイント」では、コロケーション情報を与え、まとまりとして覚えるように指導した。また、初級レベルよりさらに詳しく、類似表現の使い分けなどの解説をしている。一般的に、学習者は似た表現をいくつか知っていても、どれかひとつ使い慣れた表現に偏って使うことが多い。ここでより詳しく使い分けについて学ぶことにより、状況に合わせて表現を変える力がつけられるようにと考えた（【資料4】）。また、初級で学習した項目との比較を通して、より体系的に学習が進むように働きかけた。

【資料3】J511第7課 いく・くるの「意味と使い方」(p.51)

(2) 時間的变化の「Vてくる」「Vていく」



- ① 状態<sup>じょうたい</sup>の<sup>へん</sup>変<sup>か</sup>化<sup>つづ</sup>が<sup>つづ</sup>続<sup>く</sup>こ<sup>と</sup>を<sup>あ</sup>表<sup>は</sup>す。
  - ・ 3月<sup>あ</sup>にな<sup>つ</sup>て<sup>あ</sup>暖<sup>た</sup>か<sup>く</sup>な<sup>っ</sup>て<sup>き</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>ね</sup>。(今<sup>こん</sup>は<sup>3</sup>月)
  - ・ これ<sup>か</sup>ら<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>あ</sup>暖<sup>か</sup>く<sup>な</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>く</sup>で<sup>し</sup>ょう<sup>ね</sup>。(4月<sup>が</sup>以<sup>つ</sup>降<sup>こう</sup>の<sup>てん</sup>天<sup>き</sup>気)
- ② 「今<sup>いま</sup>」を<sup>き</sup>基<sup>じ</sup>準<sup>じゆん</sup>に<sup>い</sup>考<sup>え</sup>て、以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>か<sup>ら</sup>今<sup>いま</sup>ま<sup>で</sup>の<sup>へん</sup>変<sup>か</sup>化<sup>を</sup>表<sup>は</sup>す<sup>と</sup>き<sup>は</sup>「Vてくる」、今<sup>いま</sup>か<sup>ら</sup>将<sup>しょう</sup>来<sup>らい</sup>へ<sup>の</sup>変<sup>へん</sup>化<sup>を</sup>表<sup>は</sup>す<sup>と</sup>き<sup>は</sup>「Vていく」を<sup>し</sup>用<sup>う</sup>す。
  - ・ 日<sup>に</sup>本<sup>ぽん</sup>で<sup>が</sup>学<sup>がく</sup>ぶ<sup>が</sup>外<sup>がい</sup>国<sup>こく</sup>人<sup>にん</sup>留<sup>りゅう</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>が<sup>あ</sup>い<sup>っ</sup>た<sup>ま</sup>え<sup>て</sup>き<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。
  - ・ これ<sup>か</sup>ら<sup>も</sup>留<sup>りゅう</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>は<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>い<sup>っ</sup>た<sup>ま</sup>え<sup>て</sup>い<sup>く</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>ま</sup>す。

【資料4】J511第5課 原因・理由の「使い方のポイント」(p.36)

①「から」と「ので」の違い

i) 「から」は文末に「～からです。」「～から。」の形で使うこともできる。

「ので」は文末に「～のでです。」の形では使うことはできない。

例) ・彼女が宿題を忘れたのは、熱があったからです。

・ちょっと待っていてください。すぐ行くから。

・パーティーに参加できなかったのは、とても忙しかったからです。(○)

パーティーに参加できなかったのは、とても忙しかったのです。(×)

ii) 「から」は命令形、「～なさい」「ください」といっしょに使うことができる。「ので」は命令形とはいっしょに使えない。「なさい」「ください」とはいっしょに使える。

例) ・うるさいから、静かにしろ。(○)

うるさいので、静かにしろ(×)

・あぶないから、やめろ。(○)

あぶないので、やめろ。(×)

・もう遅いから、早く寝なさい。(○)

もう遅いので、早く寝なさい。(○)

iii) 「から」は「からか」「からこそ」「からには」「からといって」のように使うことができるが、「ので」はできない。

例) ・雨が降っているからか、集まりが悪い。

・こんなときだからこそ、みんなで力を合わせなければなりません。

・この仕事をやると決めたからには、最後までやりぬいてください。

・少し熱があるからといって仕事を休むことはできない。

【資料5】【資料6】で取り上げたのは指示詞と自他動詞であるが、区別を理解するのに時間がかかる場合は、完全に理解するのは難しくても使うことには問題がないように、どんな場合に使うか、どのような表現と一緒に使われやすいかを提示することで、産出しやすくなるようにした。

【資料5】J511第1課 指示詞の「使い方のポイント」(p.4)

① 2つの中で1つを選ぶときは「どちら」、3つ以上の中から1つを選ぶときは「どれ」という疑問詞を使う。

例) ・お二人の中でどちらが山田さんですか。

・木村さんの本はどれですか。

※ 疑問詞は以下のような形で使う。

人 : 3人以上の中から選ぶ: どの+人(方)、だれ、どなた

2人の中から選ぶ: どちら/どっち

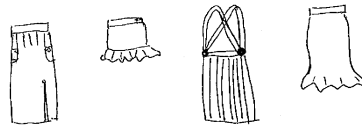
もの: 3つ以上の中から選ぶ: どの+名詞、何、どれ

2つの中から選ぶ: どちら/どっち、どちらの/どっちの+名詞

どっちの柄のスカートがいいでしょうか。



どのスカートが似合うでしょうか。



【資料6】J611第15課 自動詞と他動詞の使い方のポイント (p.119)

(1) 他動詞

他動詞は「たい」「~よう(と思う)」「~てください」「~ましょう」「~ておく」「~である」のような意志を表す表現といっしょに使うことが多い。

例) ・この机、もう少し右に動かしてください。

・旅行の日程を早く決めましょう。

(2) 自動詞

i) 「走る」「行く」「飛ぶ」などの移動動詞は自動詞だが「たい」「~よう(と思う)」「~てください」「~ましょう」「~ておく」といっしょに使うことがある。

例) ・来年こそはフルマラソンを走りたい。

・今度の夏休みに、北海道へ行こうと思っている。

ii) 「集まる」「止まる」「並ぶ」「眠る」「休む」も自動詞だが、自分の意志でそうなることを望んでいる場合、「たい」「~よう(と思う)」「~てください」「~ましょう」「~ておく」などといっしょに使うことがある。

例) ・これから2時間は休憩場所がないから、ここですこし休んでおこう。

・こっちの方がすいているから、こっちの列に並ぼう。




続いて練習問題は、まず選択式問題の「練習1」で基本的な意味や動詞の活用などを確認し、「練習2」で使い分けについて確認する（【資料7】【資料8】）。その後で、意味を理解したうえで自分で考えて産出する活動、「文作り」を用意した（【資料9】）。これらは、少しずつ難易度をあげて取り組めるようにしている。

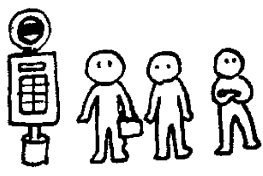
【資料7】 J611第15課 自動詞と他動詞の「練習1」（p.117）

☞ <sup>じどうし</sup>自動詞か<sup>たどうし</sup>他動詞を（ ）に<sup>か</sup>書きなさい。

1.



a. ナイフとフォークを（ ）



b. バス停に<sup>で</sup>人<sup>が</sup>が（ ）

【資料8】 J611第17課 敬語（特別な形）の「練習2」（p.145）

6. <パーティーで>

A: 遠慮<sup>えんりよ</sup>せずにたくさん<sup>た</sup>食べてくださいね。

B: はい。もう十分<sup>じゅうぶん</sup>（ ）います。

a. めしあがって    b. あがって    c. いただいて    d. おっしゃって

7. A: 何<sup>なに</sup>見てるの？

B: 写真<sup>しゃしん</sup>だよ。きのう先生<sup>せんせい</sup>が（ ）んだ。

a. なさった    b. さしあげた    c. くださった    d. いただいた

8. きのう、友だち<sup>とも</sup>の部屋<sup>へや</sup>で、一緒<sup>いっしょ</sup>にテレビを（ ）。

a. 拝見<sup>はいけん</sup>した    b. 見た    c. うかがった    d. ごらんになった

9. <社長室<sup>しゃちやう</sup>で>

社長: これについて、もっと詳しい<sup>くわ</sup>データ<sup>しら</sup>が調べてあるかな。

社員: はい、調べてあります。机<sup>つくえ</sup>に置いてありますので、すぐ<sup>と</sup>に取<sup>と</sup>って（ ）。

a. まいります    b. いらっしゃいます    c. うかがいます    d. お目<sup>め</sup>にかかります

【資料9】J611第12課 連用中止の「文作り」(p.97)

1. 発表のときは、\_\_\_\_\_ないで、話してください。
2. この野菜は、\_\_\_\_\_て(で)、食べると、おいしいですよ。  
(手段・方法)
3. \_\_\_\_\_ずに、料理が作れるようになりたいです。
4. きのうは、\_\_\_\_\_なくて、とても大変でした。
5. 面接では、\_\_\_\_\_て(で)、\_\_\_\_\_たほうがいい。

「練習1」から「文作り」まで一通りの練習を終え、最後の「間違い探し」でその課の学習項目が正しく使えるかが試される(【資料10】)。ここには、学習者から誤用が多くみられるものを取り上げている。

【資料10】J511第6課 する・なるの「間違い探し」(p.47)

□ 次の文には間違いがあります。どこが間違いでしょうか。また、どう直したらいいでしょうか。

- (1) 昨日はかぜで熱がありました。早めに家に帰って休んだので、今日はよくなりました。
- (2) 来年の3月に大学を卒業することにしました。
- (3) 卒業したら日本の会社で働きたいので、日本語の勉強を続けることになりました。

そして、最後の「8.用例見つけた!」で、その課の項目が使われている生の文章を紹介した。その文章を読み、「わかった」「読めた」という成功経験を積み重ね、学習に目的や意欲を持ってもらいたいというねらいがある。ここでは、学習者が興味を持って取り組めるような日本事情や日本文化に関わるトピックを取り上げた(【資料11】)。

【資料11】J511第3課 複合助詞の「用例見つけた!」(p.25)

株式会社クロス・マーケティングが、今年の5月に5カ国の大都市の住人に対して行った調査によると、日本人回答者の46%が、すべての収入を配偶者に渡していると答えています。中国、アメリカでは約20%、イギリスやイタリアでは10%以下です。

『Hir@gana Times』2010.8 (p.21)

以上、本教材の課の内容と、どのような意図で説明と練習を設定したか、について資料を通して概観した。これらの中で、特に本教材で工夫した点である中級の文法項目を定着させ、応用力をつけることを目指した活動について以下にまとめる。

まず、初級の文法項目を復習・整理しながら中級の文法項目を学習できるようにした(練習1・2、意味と使い方の説明)。これによって、抜けていた初級項目を補っている。次に、日本での日常場面や状況を提示し、そこでの機能を詳細に記述するよう心がけた(スタート・トーク、使い方のポイント)。状況を設定することで、どのような状況でどの表現を使うか理解できるようにしている。最後に、実際にどのように使われるかを生の日本語で提示すべく、実生活に即した用例を採用した(用例見つけた!)。これは、各課の学習のまとめとして「中級の項目は日常生活でも多く使われており、それが理解できればこのぐらいの文章は読めるようになる」という達成感を持たせること、そして学習意欲を高めることがねらいである。

これらの意図が学習者にどのように受け止められたのか、授業評価のアンケートの結果から見て行く。

### 3. アンケート結果

アンケートは、最後の期末テストの日、テスト終了後に実施した。内容は大きく、授業に関すること、教科書に関すること、自由記述の3つに分けられるが、ここでは教科書に関する結果について取りあげる。教科書に関する具体的な質問は表3に示す通りである。

表3 2011年度1学期アンケート質問項目

<p>○教科書について</p> <p>(1) 教科書の内容は難しかったか</p> <p>(2) この教科書で勉強したいことが勉強できたか。</p> <p>(3) 教科書の内容はおもしろかったか。</p> <p>○課について</p> <p>(1) 面白かった課は？</p> <p>(2) 難しかった課は？</p> <p>(3) 簡単だった課は？</p>
---

#### 3.1 教科書について

ここでは、教科書全体に関する評価について述べる。回答のしかたは5つの選択肢から選ぶものであった。各段階の評価は、5：とても感じる、4：まあまあ感じる、3：普通、

2：あまり感じない、1：ぜんぜん感じないである。(1)から(3)の設問への回答を表4に示す。

表4 2011年度1学期アンケート結果 (人)

		←感じない			感じる→		合計
		1	2	3	4	5	
(1) 教科書の内容は難しかったか。	511	1	16	23	4	1	45
	611	0	6	20	2	0	28
	711	0	4	10	12	0	26
(2) この教科書で勉強したいことが勉強できたか。	511	0	1	3	22	19	45
	611	0	0	1	18	9	28
	711	0	0	3	11	12	26
(3) 教科書の内容はおもしろかったか。	511	0	1	8	24	12	45
	611	0	0	8	14	6	28
	711	0	1	4	10	11	26

(1)の「教科書の内容は難しかったか」という質問への回答を見ると、511、611では「3普通だった」という答えが最も多かった(511は23人、611は20人)。511、611の結果で「3普通だった」「2あまり難しくなかった」を足すと、511で87%、611で93%となり、そのレベルに合わないような無理な内容ではなかったことがわかる。711になると、語形変化のある項目を取り上げているためやや難易度が上がって、「4まあまあ難しかった」が一番多くなっている(46%)。とはいえ、「3普通」も38%いることから、中級中期という段階ゆえに難しく感じることはあるものの、それほどきつい状態で授業に臨んでいたわけではないことがわかる。

教科書が難しくなかったということが物足りなさを意味するのではないということは、次の(2)(3)の質問に対する結果を見るとわかる。

(2)の「この教科書で勉強したいことが勉強できたか」という質問に対して、「5とてもよく学べた」「4まあまあ学べた」と答えた学習者がすべてのレベルで8割を超えている(511は91%、611は96%、711は88%)。

(3)の「教科書の内容はおもしろかったか」という質問に対して、多少難しいと感じた711レベルでも80%以上の学習者が「5とてもおもしろかった」「4まあまあおもしろかった」と答えている。3レベルともに7割を超えていることから今までに知っている内容を整理しつつ、興味を持って取り組めたことが見て取れる(511は78%、611は71%)。

以上のことから、本教材は、学習者に無理をさせることなく彼らのニーズに合った知識が提供できており、また一般的には難しいと思われている文法を楽しく学べる教材である

と言えるだろう。

ここでは詳しく取り上げないが、課の中身の構成について質問した結果では、今回工夫した点(2.2)について、学習者から高評価を得ることができた<sup>4</sup>。本教材で行った工夫が受け入れられたと言える結果である。

### 3.2 取り上げた課について

ここでは、アンケート結果の(2)、本教材に取り上げた各課の項目について結果を検討する。回答結果を図1～3に示す。

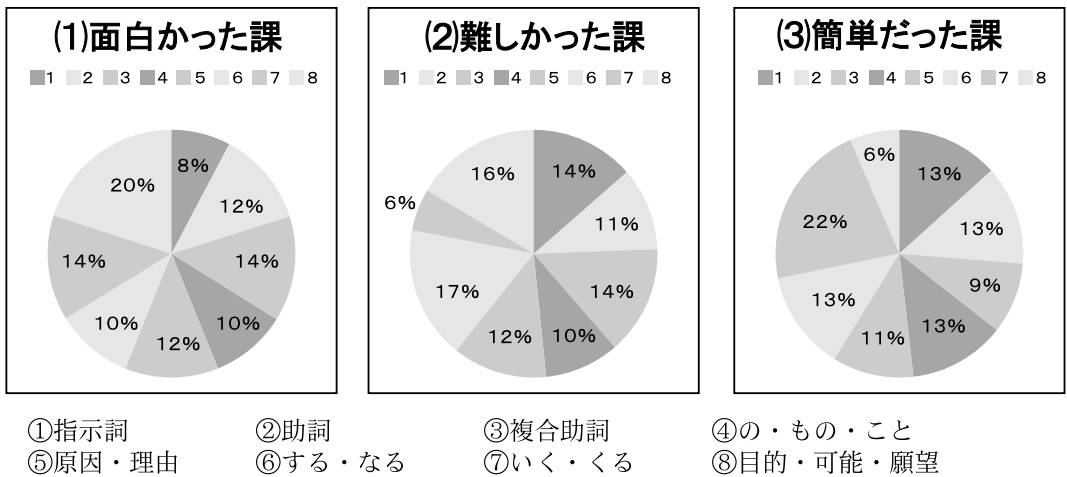


図1 J511の結果

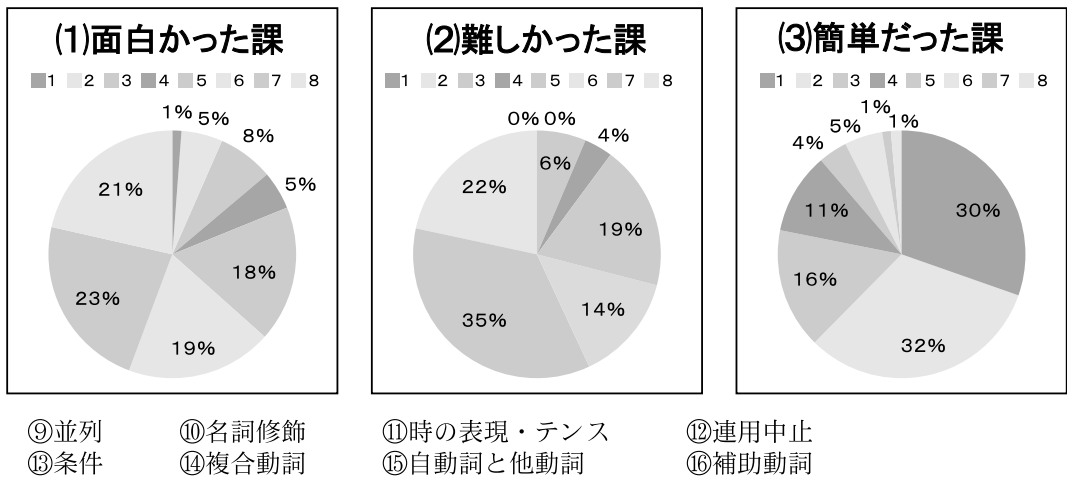


図2 J611の結果

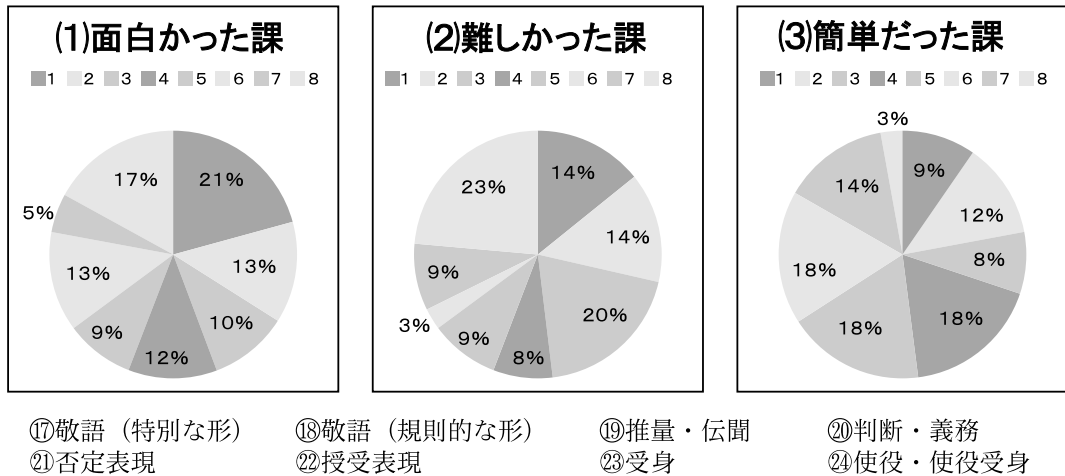


図3 J711の結果

(1)の面白かった課については、各レベル独特の結果が得られた。まず、511レベルでは、大きな偏りなくすべての課が「おもしろい」と回答されている。これは、初級から中級に上がってきて、それぞれに知りたかった項目が取り上げられていた結果ではないだろうか。次に611レベルでは、前半4課分に対して「おもしろい」という回答は少ないが、後半の4課に対しては急に数値が上がっている。後半に取り上げているのは、条件、複合動詞、自動詞と他動詞、補助動詞である。これらの4つの課は(2)の「難しかった課は？」という質問に対しても高い数値になっていることから、興味を持って取り組めたことを表わしているのではないかと考えられる。中級初期から中級前期に上がってきて、学習項目が少しずつ難しくなっていくからであろう。最後の711レベルでは、17課の特別な敬語と24課の使役・使役受身が高く、23課の受身が低かったがそれ以外はほぼ差がない。特別な敬語と使役・使役受身は(2)の「難しかった課」でも数値が高いことから、やり甲斐があったという意味だと解釈できる。

(2)(3)の難しかった課と簡単だった課は、ほぼ裏返しの結果になっている。例えば611の15課「自動詞と他動詞」は難しいと思った人が35%、簡単だと思った人が1%である。711の24課「使役・使役受身」は難しいが22%、簡単が3%である。このようにはっきりしている課は、教師側も難しいだろうと思って取り上げているのでこちらの予想していた通りである。しかし、難しいと思う人と簡単だと思う人が同じくらいの割合でいる511の1課「指示詞」や、711の18課規則的な形の敬語などは学習者にとってどこが難しくどこが簡単なのか見極め、説明や練習内容を検討する必要があるだろう。

また、多くの学習者が簡単だと思っている課についても、取り上げる必要がないのか、あるいは学習者が簡単だと思い込んでいるだけなのかを探り、教材を改訂していく必要が

ある。511では7課の「いく・くる」が、611では9課10課の「並列」「名詞修飾」が、711では22課の「授受表現」がそれに当たる。知っているからこれ以上勉強する必要はないという考え方で終わらせず、学習意欲を引き出すような内容にしなければならない。

## 5. まとめと今後の課題

本教材の特徴となる3つの点は、学習者からの反応を見る限り、2010年度の結果に引き続き、概ね好評であり受け入れられたと言える結果であった。2010年度の授業評価および教材開発の経緯については、宮崎他（2011）を参照されたい。

学習者に自分の文法項目の不完全なところを自覚してもらい、それを補いながら新たに学習を進めていくようにできたかという点においては、改善の余地がある。3.2のアンケート結果にも表れているように、簡単だと思う人、難しいと思う人が同程度いる課、多くの学習者が簡単だと思っている課はその要因を探る必要があるだろう。前者については、学習者がどこに難しさを感じるのか、後者については、自分ができていると思込んでいるだけなのか、本当にその課が必要ないのかについて検討していかなければならない。部分的に、説明が表面的であったり、練習問題自体の難易度が低かったりした可能性も捨てきれない。学習者にとって必要な情報が与えられているか、学習意欲を引き出せる内容だったかを検討し、教材改訂を続けていきたい。

## 注

1. 2010年度は、3学期間（1年）にわたって2レベル4科目で授業を行い、学期末には毎回、教材と授業に対するアンケートを実施した。教材開発と1・2学期の授業については宮崎他（2011）で報告している。
- 2.3.4. 『実用日本語文法』に取り上げた学習課、Moodleを使った学習の仕方、課の中身の構成に関するアンケート結果については、鈴木他（本論集掲載）に詳しい。Moodleとは、インターネットを使って学習できる補助教材である。どこからでもアクセスできるため、ここに文法問題を載せ、学習者が自分で予習復習できるようにし、自習を促した。

## 参考文献

- 許明子・鶴町佳子（2009）「日本語学習者の中級レベル観」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号：19-38
- 鈴木秀明・榎陽子・許明子（2012）「中級レベル文法クラスの実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第27号：153-169
- 宮崎恵子・二瓶知子・鈴木秀明・許明子（2011）「中級日本語文法教材『実用日本語文法

1・2』の開発及び実践報告」『日本語教育方法研究会会誌』Vol.18, No.1 : 46-47

## 教材

許明子(代表) 鈴木秀明・二瓶知子・宮崎恵子 (2011) 『実用日本語文法』 筑波大学留学生センター